

WEB 開催、2021.02.12-25

題名

妊孕性温存目的の精子凍結保存を可能にする因子についての検討

発表者

井上 朋子¹⁾、森下 みどり^{1) 2)}、寺脇 奈緒子¹⁾、貫井 李沙¹⁾、姫野 隆雄¹⁾、小宮 慎之介¹⁾、
浅井 淑子¹⁾、森本 義晴¹⁾

1)HORAC グランフロント大阪クリニック 2) 三重大学産婦人科

【目的】AYA 世代の男性がん患者にとって射出精子の凍結保存は標準的な妊孕性温存法であるが、保存時の精液所見が不良である場合も多い。妊孕性温存治療の可否に関係する因子を検討した。

【方法】2016 年から 2020 年 10 月の間に、妊孕性温存目的に来院した男性がん患者 62 名について年齢、原疾患、既往治療内容、精液所見、精子凍結の可否の項目を後方視的に集計した。統計解析はロジスティック回帰を用いて行い、有意水準は 5%未満として検討した。

【結果】62 人の患者の年齢分布は 13 歳から 58 歳であり、39 歳以下が 85%を占めた。既婚者は 20 名、子どもがいる者は 6 名だった。患者の原疾患はすべて悪性腫瘍で、血液疾患 33 名、骨軟部疾患 10 名、精巣・前立腺疾患 8 名、その他 11 名であった。15 歳の患者 1 名はカウンセリングの結果精子凍結を希望しなかった。再発 3 名を含む 13 名がすでに抗がん剤を投与されており、この中で正常精液所見 (WHO 基準) と診断されたのは 1 名だけであり、無精子症や精子死滅症のため 6 名は精子凍結ができなかった。一方で化学療法開始前の 48 名のうち正常精液所見を示したのは 30 名、精子凍結が可能だったのは 47 名だった。化学療法前で精子凍結ができなかった 1 名は 13 歳で採精が困難であった。化学療法が加わると、精子凍結の成功はオッズ比 0.025 (95%CI:0.002-0.258、 $p<0.01$)、正常精液所見はオッズ比 0.035 (95%CI:0.004-0.342、 $p<0.01$) と有意に低下した。また、13 歳から 15 歳の 7 名の患者の精液所見は WHO 基準を満たすものではなく、比較的良好な状態で凍結できたものは 4 名のみだった。精子凍結可能だった最低年齢は 13 歳 6 か月だった。

【考察】化学療法の開始により精液所見が悪化し、精子凍結ができなくなる傾向があるため、できるだけ治療前に精子凍結をすることが望まれる。また、10 代前半の男児は性的に成熟過程にあるために、精液所見は個人差が大きいことを考慮するべきである。